

I セット5 過程方式

必要に応じてお読みください

3年A漢字

実

指導上の留意点

1. 音訓

音：ジツ

訓：み・みの-る

同音の漢字 [ジツ] 日①

同訓の漢字 [み] 三①, 身③

[みのる] 常用漢字にはない。

(○数字は、配当学年)

読みかたは、音「ジツ」、訓の「み」「みの-る」である。音訓とも指導する。

◎送りがな

訓の「みの-る」は、送りがなが生じることをおさえておきたい。

【実る】《実がなる・実ができる》《努力などがあっていい結果が生じる》という意味での動詞は、語幹「みの」活用語尾「る」であり、そのまま「実る」「実らない」「実ります」「実った」などと送る。

【実り】《みのること・みのったもの》の意味の名詞は、「実る」から転成したことから「り」を送る。「実りの秋」「実りの多い研究」など。

なお、名乗りが「実」一字で「みのる」と読むことが多いので、場合によっては、送りがなを強調する必要がある。

◎1字音読み語

「実」に助詞をつけて[ジツ]と読む場合が、よくある。小学生向けの読み物にもしばしば登場する。1字なので訓とまぎらわしい。実態に合わせて、「漢字語の学習過程」(コトバあつめ)で取り上げてよいだろう。

【実は】【実を言うと】《ほんとうのことを言うと》

【実のところ】《ほんとうのところ》

【実に】《ほんとうに》《まったく》

【実の】《血がつながっている》

〔用例〕

- 実^{じつ}は、ネコのひげをとると、ネズミをとらなくなるのではなく、とれなくなるのです。
- あの竜はなあ、実^{じつ}はオラが作った木の竜だ。
- 実^{じつ}を言うと、ぼくは、トマトやピーマンがきらいだった。
- 実^{じつ}のところ、母が腹を立てるのは、しんちゃんがまじめに勉強しないからだ。
- 小鳥の声や動物の立てる音が実^{じつ}によく聞こえるんです。
- ガンの群れは、実^{じつ}にすばやい動作でハヤブサの目をくらしながら飛び去っていきます。
- 東京に、仕事をしている実^{じつ}の弟がいます。

2. 意味

ほんらいの意味	1 なかみが いっぱい つまっている。	充実。
派生的な意味	2 心がこもっている。 あぶなげない。	実直。誠実。 着実。確実。
基本的な意味	3 ほんとうの。 (だいじななかみがみちている。からっぽでない。きちんと存在している。)	真実。事実。 現実。実行。 実際。実験。
基本的な意味	4 植物のみ。 みをつける。(なかみがみのっている。)	果実。 木の実。 結実。

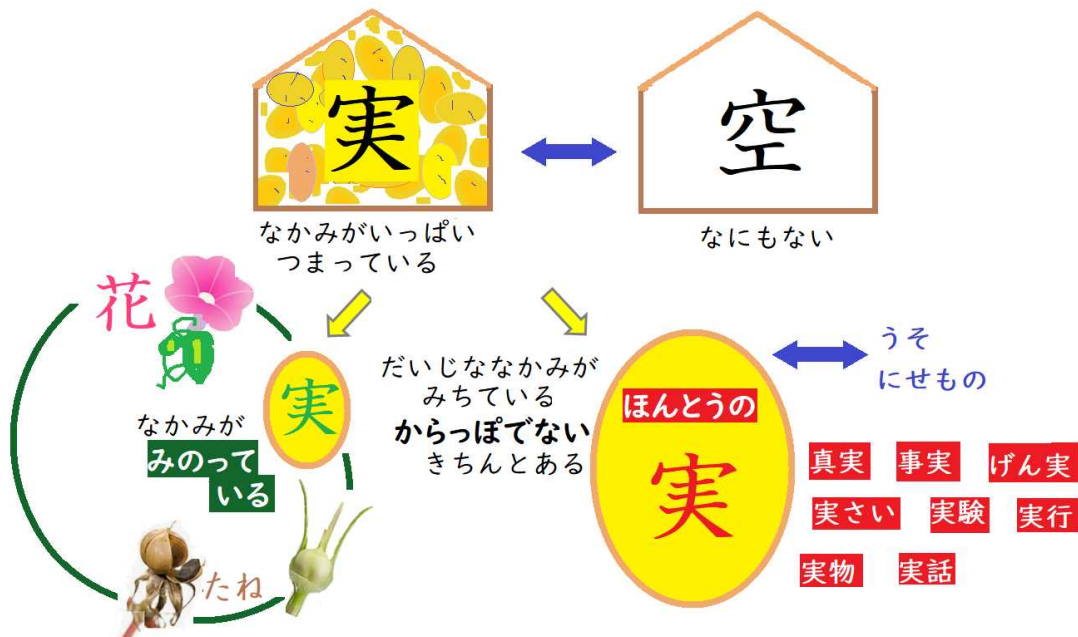
【実】のほんらいの意味は、**1** 《家のなかに財宝がみちている》ことから《なかみがいっぱい つまっている》ことにある。「充実」「虚実」などの語がこれにあたる。転じて、**2** 《心になかみがみちている》ことから《心がこもっている》という意味で「誠実」「忠実」「情実」「実直」などの語や、《まちがない》《あぶなげない》という意味で「着実」「確実」「堅実」などの語が用いられる。

ただし、以上の意味やコトバは、小学校3年生にはやや難しい。

現代語で多く使われる基本的な意味は、**3** 《ほんとうの》にある。「**真実**」「**事実**」「**現実**」「**実際**」「**実在**」などのような「学習論理語イ」も、すべてこの意味で用いられている。「実際の…」(実物、実力、実話、実例など)、「実際に…」(実験、実行、実習、実感など)に置き換えられる漢字語も多数ある。今後、学習面、生活面にわたり使いこなすことが期待される語が多いので、小学校3年生の段階でいねいに指導しておきたい。

《なかみがいっぱい つまっている》ことから**4** 《植物のみ》《みをつける》という意味が派生しており、和語の「み」「みじる」が当てられる。「草花の実」「木の実」という点では、低学年のうちからなじみ深いので、わかりやすいだろう。

一方で漢語の「果実」「結実」などは、やや難しい。「果」も「結」も4年配当漢字であることから、その際に「果実」「果じゅう(果汁)」の語や、「努力が実を結ぶ」「努力が結実する」などの用法を学ぶことが考えられる。



◎字源

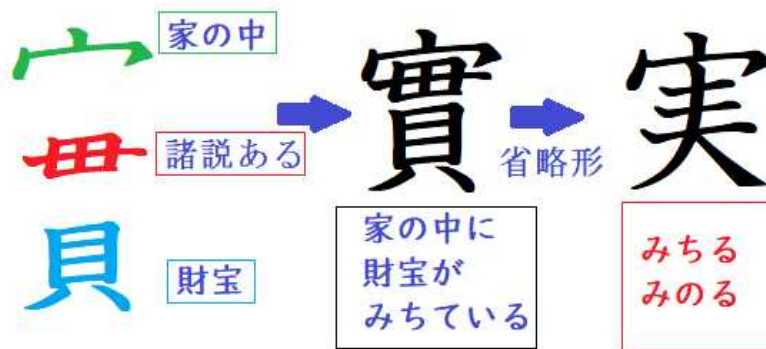
小学生向けの学習漢字辞典は、どれも旧字体の「實」にさかのぼって解説するが、旧字体を取り上げることは、小学生には**適当**といえない。

また、旧字体の「**実**」の部分の解釈が諸説に分れる。

代表的なものは、「宀+**周**+**貝**」というものと、「宀+貫(実+貝)」というもの。21世紀の現代でも、説が更新される可能性があり、軽々に字源を語ることができない字である。

ただし「宀」と「貝」についての説は、どれも一致している。

そこで「実」の「うかんむり」に着目し、《家のなかに、なかみがいっぱいつまっている》ことを表した字だと説明するだけで十分である。



◎部首と偏旁冠脚

漢和辞典は、現行字体「実」も、旧字体「實」も、「宀部」[ベン部]に所属させている。「宀」は、「屋根」のかたちをえがいた象形文字とみられ、「宀部」には「建物」や「住むこと」にかかわる字が集められている。部首については、教科書では漢字辞典の引きかたを学ぶ4年で本格的に取り扱う。

《こどもを家の中で養い育てる》ことからできた「字①」は、《コトバを書きしるすための記号》としての《もじ》の意味で使われることから、漢和辞典では、「宀部」[ベン部]ではなく伝統的に「子部」[シ部]に集められている。また、「空①、究③」などは、その成り立ちから「穴部」[ケツ部]に集めている。こうしたことがらは、4年以降に実際の漢字辞典をもとに触れるとよいだろう。

(○数字は、配当学年)

「うかんむり」をはじめ、「さんずい」「くさかんむり」など**偏旁冠脚**[へんぼうかんきゃく]の**呼び名**について、教科書では「へんにつくり」などの名で3年から教材化されている。3年生の段階では、構成要素を意識させる意味で偏旁冠脚に着目させると効果的である。

「うかんむり」と呼びならわす偏旁冠脚をもつ字には「家②、室②、客③、定③、宮③、守③、寒③、安③、宿③」などたくさんある。また、「院③」の構成要素「完④」、「館③」の「官④」なども「うかんむり」である。

「うかんむり」とは、カタカナの「ウ」に似ているからというのが定説である。一方で、カタカナの「ウ」は「宇」がもとになっていることから「宇かんむり」だったのではともいわれる。現段階で、実際のところは、わからない。

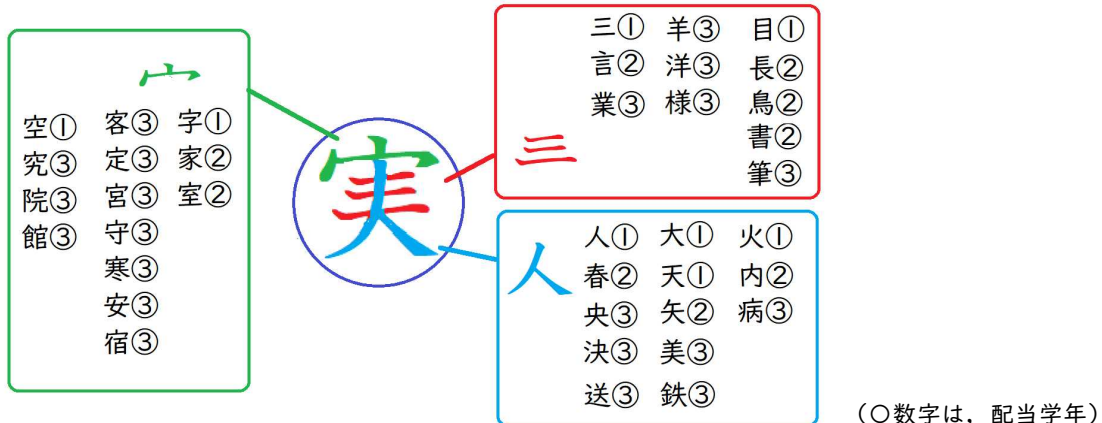
なお、「冗」や「冠」の構成要素を「わかんむり」と呼ぶのは明らかにカタカナの「ワ」

に似ているからとみられる。カタカナの「ワ」は、「和」のつくりの「口」をくずしたもの、あるいは「〇（輪）」からなったものとみられている。これと同様だとすると、カタカナの「ウ」に似ているからといえなくもない。

ただし室町時代の国語辞書『運歩色葉集』など古辞書にあたると、「うかんむり」（ウカブリ、ウカンブリとも）の呼び名が、さきに定着していたふしがあり、それに引かれてのちに「わかんむり」の呼び名がうまれた可能性もある。

3. 字形

◎構成要素の学習経験の確認



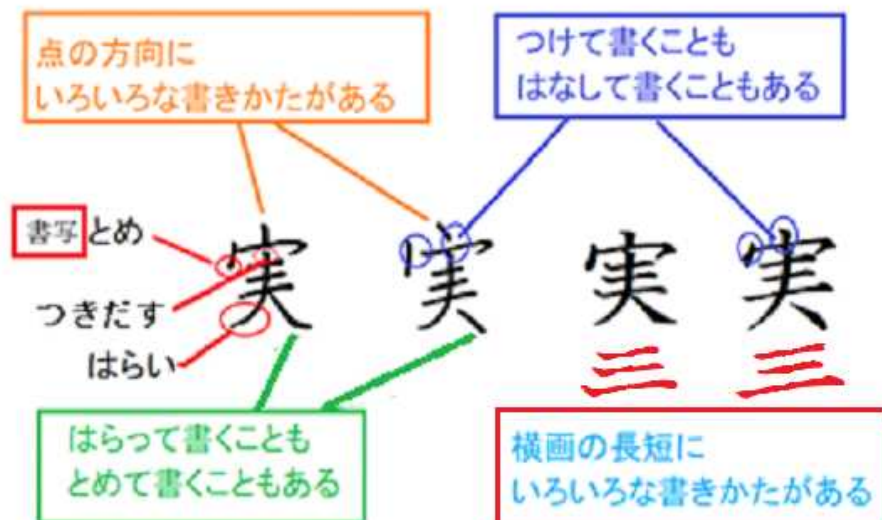
◎「人」の右画の始筆位置に注意

「実」と「春」は、ともに「三→人」の順に書き進めるのは、共通しているが、「人」の右払いの始筆の位置に気をつけるようにしたい。



*「春」「奉」「奏」などの構成要素に「実」があるが、これらは、現行字体で一致しているだけで、それぞれの字源は異なる。また、「実」とも無関係である。

◎評価における許容例



4. 漢字語（意味・接触体験の確認・価値）

「実」は、「[学習論理語イ一覧表](#)」や「教育基本語イ表」に採用されている漢字語を多数、形成している。また、小学校3年生にとどまらず、将来にわたってたびたび使われる可能性がある語もある。

1	なかみがみちている。	充実。
2	心がこもっているなど。	着実。切実。确实。実直。誠実。
3	ほんとうの。 (ありのまま) (じっさいの) (げんじつの) (じっさいに)	真実。実に。実は。実際(じっさい)。 事実(じじつ)。無実。写実的。 現実。実在。実物。実力。実情(実状)。実態。 実体→名目。実質的→形式的。 実数→虚数(有理数・無理数) 実験。実行。実現。实用(実用化・実用的)。実感。 実証。実践。実施。
4	植物のみ。みをつける。	果実。木の実。結実。

「学習論理語イ一覧表」の語
 「教育基本語イ表」で小学校にあてている語

指導に重点をおきたい語

真実 しんじつ

【真実】	真(ほんとうの) = 実(ほんとうの)
① (名詞・形容動詞) ほんとうのこと。 うそでないこと。	真実を正しく知らせる。 真実な気持ち。真実な内容。
② (副詞) ほんとうに。心から。	真実、かわいそうにと思った。

②は、いまではやや古い言いかたとなっている。「心から」「たしかに」というコトバのほうが一般的である。ここでは、とりあげなくてよい。

◎指導のポイント

- ① 「ほんとうのこと」「うそやかざりがないこと」「正しいこと」を端的に表現するのがこの「真実」という漢字語である。
- ② 内容や使いかたは、高度なものだが、小学校3年生の段階で、こういうコトバがあることを知るだけでも価値がある。
- ③ 「真実」＝「ほんとうの」と置き換えられるが、生活語の「ほんとう」には、「真実」だけでなく、「本物・実物そのもの」「本音」「本来・本途」などに当てられる意味があることはふまえておきたい。
- ④ 対義語は「うそ」「うそを言う」「だます」「事実ではない」「まちがい」「あやまり」など範囲が広い。

ま ち が い そ	ほ ん と う の こ と	こ と ば な か み	一 年
			二 年
	正 し い		三 年
			四 年
あ や ま り			五 年
	真 実	真 理	六 年
虚 偽	概 念		中 学

「学習論理語イ一覧表」における「真実」の位置

◎予想される文例

「わたしは、その話は真実だと思います。」(ほんとうのことだと思います。)

「みなさんに真実をつたえます。」(ほんとうのことをつたえます。)

「そのうわさは、真実ではありませんでした。」(ほんとうのことでは……)

◎「真」の意味と使いかた

真	音：シン 訓：ま
---	-------------

「真」は、3年配当漢字で、全体をつらぬく基本的な意味は、《うそもごまかしもなく正しい・ほんとうの》を表す。「真実・真理・真相」などがある。「写真」(ありのままを写しとる)もこれにあたる。合わせて《まじりけのない》という意味の「真夏・真昼・真っ白・真空」などの語を形成する。「真」という漢字の基本の意味をとらえるためにも「真実」を指導する意義は大きい。

◎「真実」の意味と使いかた

① 《ほんとうのこと・うそでないこと》が、この語の基本的な意味である。

「ほんとう ⇔ 正しい ⇔ 真実」と小学校3年生でも互いに置き換えられるようになっておくとよい。

合わせて、「真実」と対になる関係にあるのが「うそ・まちがい ⇔ あやまり」(「虚偽」)だということも意識できるようにしておきたい。

また、後述の「事実」や「じっさい」などと意味や用法が重なる場合がある。関連づけて扱うことも考えられるが、それらとの違いを考えるのは高度である。

この段階では、“認識”“反映”にかかわる「学習論理語イ」として使いこなすことができるための素地を身につけておきたい。

「真実」は、「truth」の訳語(「真理」とも)として、高等学校国語科や社会科、公民科などに、しばしば登場する哲学や倫理学の語でもある。いずれは「事実」と「真実」の違い、「真実」と「真理」との関係なども考えられるようになる。また、一般に使うことはまれだが、《永久に変わらない絶対究極のまことのもの》という意味の仏教のコトバでもある。

【用例】

<p>パパの言う「事実」と、人の心の中で動く「物語」は全然別のものなんだから、まいは気がつき始めた。二つを混同してはいけないけれど、どちらが自分にとっての「真実」かは、きっとそのときどき、ひそかに自分で決めてもいいことなんだろう。 (梨木香歩「ブラッキーの話」『小学国語』6年上巻、教育出版)</p>
--

「真実はいつもひとつ」と探偵役の主人公が言うのをテレビなどで耳にする子もいるだろう。探偵物のマンガや刑事物のドラマなどに「真実」がしばしば登場する。しかし、実際の事件などの《ほんとうのようす》は「真相」である。それをさぐるのが捜査であり、その結果を見きわめるのが裁判である。捜査結果や判決は、ときとして「事実」の認定を誤る。

「真実」は、認識の一側面であることをわすれてはならない。あくまでも「主観的」なものであって、「事実」のような「客観的」なものではない。

指導に重点をおきたい語

事 実 じじつ

【事実】 事（ありのままのこと）＝ 実（ほんとうのこと）	
① （名詞）じっさいあったことがら。 ほんとうに起こったことがら。 じっさいにあることがら。げんじつにあることがら。いま、じっさいに目の前にあらわれていることがら。	事実をたしかめる。 この話は事実だ。 事実をよく見なさい。 ～という事実気づいた。 実験と観察でわかった事実。
② （副詞）ほんとうに。たしかに。	事実， そうなんだ。

②は、「事実，ぼくは知らなかった」「事実，ほとんどが〇〇だった」などのように、そのようなものごとや状態がたしかに存在すると判断するときに使われる。「実際」とか「現に」というコトバと似ている。小学校3年生の段階で、あえてとりあげる必要はない。

◎指導のポイント

- ① 「じっさいに起こったことがら」や「現実にあることがら」を表現するのが、この「事実」という漢字語である。
- ② 生活語として使われることが多く、「真実」よりなじみ深いだらう。
- ③ 「事実」は、「実さい」と関連づけて指導すると意味がわかりやすくなる。
- ④ 「事実」に対応するのは「じぶんの考え」「意見」である。意識できるようにしたい。

◎人間の知的活動用語

認識	じぶんの考え	一年
	じっさい	二年
	じじつ	四年
	客主	六年
	視観	中学

ひらがな語は日常生活でつかっているもの。それを手がかりに正式な術語（科学的概念）に高めていくのである。④⑤の区分や学年の区分は大体的ところをおことわりしておく。

「学習論用語一覧表」における「じっさい」「じじつ」の位置

◎予想される文例

- 「わたしは、その話は事実だと思います。」（じっさいにあったことだと…）
 「みなさんに事実だけをつたえます。」（じっさいにあったことだけを…）
 「そのうわさは、事実ではありませんでした。」（じっさいにあったことでは…）
 「実けんしてみたところ、事実がわかりました。」（じっさいにあることがらが…）

◎「事」の意味と使いかた

事 音：ジ・ズ
訓：こと

「事」は、3年配当漢字で、全体をつらぬく基本的な意味は、《ありのままのものごと・ことがら》を表す。「事実・食事・行事・返事・工事・大事・記事」「出来事・物事」などがある。

比較的わかりやすい語を形成する。なお音の[ズ]は、小学校では学ばない。

◎「事実」の意味と使いかた

前ページの表でしめす①が、この語の基本的な意味である。

「事実」は、「～という事実がある。」のように《じっさいあったことがら》や《いま、じっさいに目の前にあらわれていることがら》を表す。そこで、「事実」を「じっさい」と関連づけて指導するとよい。

「じっさい」(実際)は、《ありのままのこと》を表す生活語である。「その話は、じっさいとちがう。」などのように「事実」と一致することが多い。

また、ときとして「真実」と変わらない場合も出てくる。

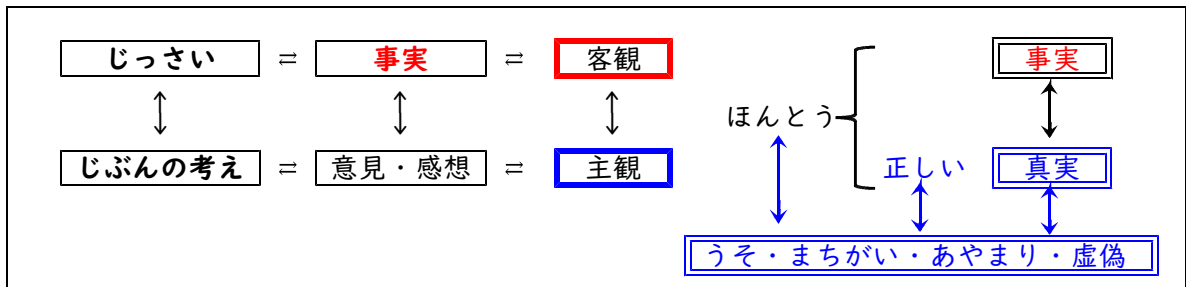
次ページに「じっさい」「事実」「真実」の文例を対応させ一覧にしたが、小学校3年生段階の場合、これらを明確に区別してつかい分けるのは、かなり高度といえる。一例をあげると下図の(a)と(b)との区別である。

(a) その話は	じっさいにあったこと	だ	と思う。	→	その話は	事実	だ	と思う。
(b) その話は	ほんとうのこと	だ	と思う。	→	その話は	真実	だ	と思う。

この段階では「じっさい(実さい) ⇔ 事実」と互いに置き換えられるようになることに重点をおきたい。

合わせて、「事実」は「じぶんの考え」と対になっていることも押さえておきたい。

◎「事実」と「意見」、 「客観」と「主観」



「じっさい ⇔ 事実」は、「客観」という術語に高めていく前提に位置している。

このあと上の学年になると、「話す・聞く・書く・読む」などさまざまな学習活動の場面で、「事実」と「意見・感想」とを区別することが求められる。ほんとうにあったことや、だれでも確かめられることが「事実」である。一方、「意見・感想」は、あるものごとについて、自分が考えたこと、心に感じたことにあたる。

ここでの「事実 ⇔ 意見(じぶんの考え)」という見かたは、やがて「客観 ⇔ 主観」へとつながっていく。「自分の心の外にあるもの」が「客観」であり、「自分の心の内にあるもの」が「主観」である。こうした対比から、《自分の考えを入れず、ものごとをありのままに見ること》が「客観」ということになる。

なお、「真実」は「事実」との対比のうえで、「虚偽」とともに、「主観的」なものである。

◎「事実」と「じっさい」「真実」の意味と使いかた

下線部分が互いに置き換えられるかどうか検討してみるとよい。

	じっさい	事実	真実
<u>じっさい</u> にあったことをたしかめる。	○	○	○
わたしは、その話は <u>じっさい</u> にあったことだと思います。	○	○	○
みなさんに <u>じっさい</u> にあったことだけをつたえます。	○	○	○
うわさは、 <u>じっさい</u> にあったことではなかった。	○	○	○
〇〇さんが言うことが <u>じっさい</u> にあったことなのだろうか。	○	○	○
みんなにとって、意外な <u>事実</u> が明らかになる。	△	○	△
つまみ食いをしたという <u>事実</u> をお母さんに打ち明ける。	△(①)	○	△
急に体重がかわっていった(という) <u>事実</u> をよく見なさい。	△(①)	○	
妹がりんごのかわをむける(という) <u>事実</u> に気づいた。	△(①)	○	
たし算ができるオウムがいた(という) <u>事実</u> におどろいた。	△(①)	○	
あなたがつりがすきだという <u>事実</u> は、みとめましょう。	△(①)	○	
実けんしてみたところ、 <u>じっさい</u> のことがわかった。	○	○	
弟は、 <u>じっさい</u> は何も手つだってくれなかった。	○	△(②)	
ゆめのような話だけれど、 <u>じっさい</u> にはむりだ。	○	△(②)	
のぞんでいたことが、 <u>じっさい</u> に起きた。	○	△(②)	
会いたいと思っていた〇〇さんに <u>じっさい</u> に会えた。	○	△(②)	
たしかめるため <u>じっさい</u> に体育館まで行ってみた。	○	△(②)	
〇〇さんを親友だと思うのは、わたしの <u>真実</u> の気持ちだ。			○

△(①)「じっさいにあったことがら」「じっさいにあることがら」に置き換えられる。

△(②)「事実上」あるいは「事実として」に置き換えられる。

◎生活語だけでなく哲学の術語や、法律用語としても使われる「事実」

「事実」というコトバは、小学校低学年のうちから日常的につかわれるが、英語の「fact」の訳語として多方面で使われる。一例をあげると、つぎのようなものがある。

【用例】

観察や実験によって得られたさまざまな事実を土台として、それらに共通する一般的法則を見だしていく方法が帰納法である。(高等学校公民科「倫理」)

実験によって積み重ねられた事実が体系化されて理論が生まれ、理論は実験によって検証されて確立される。(高等学校理科「物理」)

このほか、「事実」は、哲学の概念をあらわす術語でもある。

また、法律のコトバとしても、重要なやくわりを担っている。

関連して指導しておきたい語

実さい じっさい

【じっさい】	実(ほんとうの) → さい
① (名詞) ものごとのありのままのようす。	その話は、じっさいとちがう。じっさいのすがたを見てみたい。
② (副詞) ほんとうに。実に。たしかに。ほんとうのところ。	じっさい、やってみるとおもしろかった。

◎指導のポイント

- ① 「実」という漢字の意味をこの一語に体现しているところにこのコトバの価値がある。「実口」のような「実」が前接する2字の漢字語の大半は、《じっさいの～》《じっさいに～すること》と読み下すことによって、意味の理解につなげることができるからである。

【例】

実物（じっさいのもの）、実力（じっさいの能力）、実情（じっさいの事情）、実態（じっさいのありさま）、実質（じっさいの内容や性質）、実用（じっさいに役に立つこと）、実験（じっさいにたしかめてみること）、実行（計画などをじっさいにおこなうこと）、実感（じっさいに感じること）、実践（じっさいの場でおこなうこと）、実施（きめられたことを、じっさいにおこなうこと）

- ② 「真実」や「事実」と比べて、生活語として使われることが多いことから文づくりがしやすい。「事実」の文づくりのヒントに、「じっさい」を使うと効果的である。

◎「実さい」の意味と使いかた

「じっさい」は「事実」よりも生活語の色あいが濃い。低学年のうちから、しばしば使ってきただろう。

「その話は、じっさいとちがう。」のように《ありのままのこと》《ものごとのありのままのようす》を表すときに使われる。また、「望んでいたことが、じっさいに起こった。」「〇〇さんにじっさいに会えた。」などは、うそでも空想でもない、そのときその場で起こった《ほんとうにあったこと》をさしている。「じっさいに体育館まで行ってみる。」のように《ほんとうにやってみる》ときにもつかわれる。

◎「際」の意味からかけ離れている「実際」

「実さい」をこの段階では、漢字で「実際」と指導する必要はない。

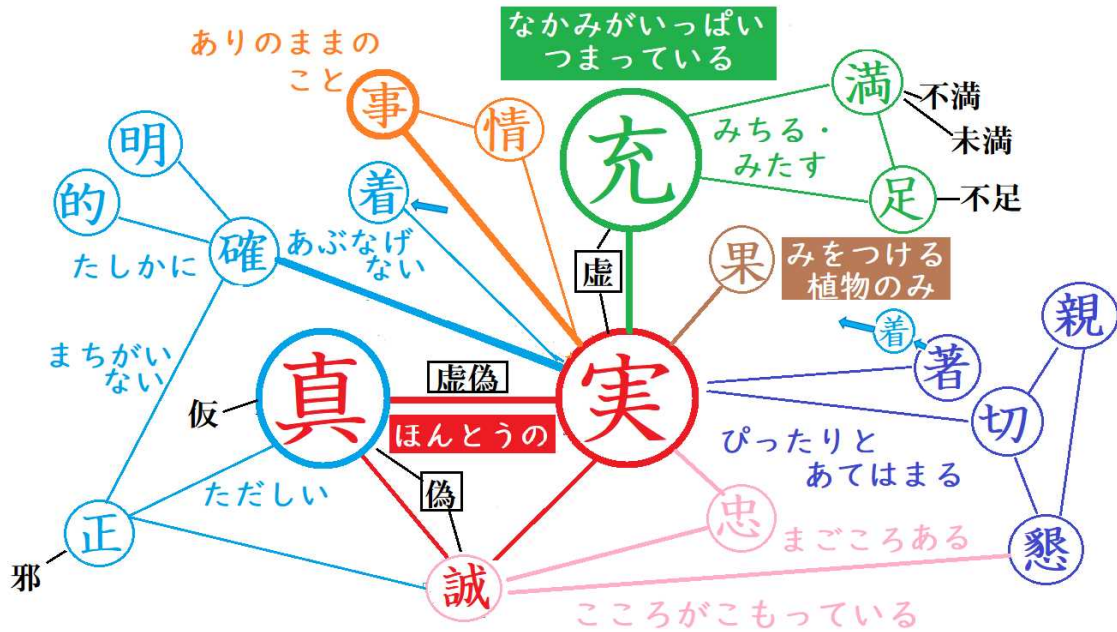
際 音：サイ
訓：きわ

「際」は、5年配当漢字で、全体をつらぬく基本的な意味は、「際限・水際」などに見られるように《さかいめ・区切り》である。転じて「交際・国際的」のように《区切りをまたぐ》を表す。（「がけの際」「瀬戸際」などにみられる[きわ]という訓は、高等学校段階に割り振られている。）

造語力のない漢字で、5年段階になっても「国字研・[教育漢字精選案](#)」では、「書きの指導もおこなうが、読みの力を定着させる」（書きの力は、上学年や中学校で定着をはかる）漢字と位置づけている。

「実際」は、もともとは仏教用語で、《**真実の辺際**》という意味で《ある存在の究極的なすがた》を指すところからうまれた。そんなところから「際」の字が使われたのだが、現代語の「実際」は、「際」の字のほんらいの意味からかけはなれたつかわれかたをしている。「じっさい」という表記をとっても通じる生活語となっている。

5. 類義字と並列語（類義のならびのつながり）



◎類義のならびとしての「真実」

漢字 **真** は《うそもごまかしもなく正しい》ことからくる《ほんとうのこと》、**実** は《なかがみからっぽでなくしっかりしている》ことからくる《ほんとうのこと》ということで、「真実」は、それぞれの意味《ほんとうのこと》をかさねて、強調した類義のならびである。

「真実」の対義語は**虚偽**である。対義のならびに「虚実」とあるように「実」の対義字は **虚**《からっぽ》であり、「真偽」とあるように「真」の対義字は **偽**《うそいつわり》である。そして「虚」と「偽」の類義のならびが**虚偽**ということになる。

◎「実」のおもな意味と語例

- 1 **なかがみがいっぱいつまっている**
充=実 ← (**空=虚**)・(**虚←実**)、〈充=満・充=足・満=足〉
- 2 **こころがこもっている・あぶなげない**
まごころある 〈**誠=実** (←不誠実)・**忠=実**・忠=誠〉, **実=直**
ぴったりとあてはまる **切=実**, 〈親=切・懇=切・懇=親〉
あぶなげない **着=実**, **実=著**・**実=着**, **確=実**
- 3 **ほんとうの** 《まこと》
 (だいじななかがみみちている。からっぽでない。きちんと存在している。)
真=実 (←**虚=偽**)・**誠=実**・**真=誠** (**真=成**)
 現→実。実→行。実→際。実→験。
- 4 **みをつける 植物のみ** **果=実**。木の实。
 みをつける。(なかがみみちている。) 結←実。